

昭和51年5月9日第三種郵便物認可・昭和51年6月1日発行（毎月1回1日発行）通巻第55号

ヒマラヤ

HIMALAYA

1976年6月号



日本ヒマラヤ山岳協会——HAAJ

HIMALAYAN ALPINE ASSOCIATION OF JAPAN

— 主 要 目 次 —

●第6回東日本ヒマラヤ研究会……………	1	●ヒマラヤ閑話—5 ヒマラヤの商人……………	14
●総会報告……………	2	●クンプの旅……………	15
●ヒマラヤとシルクロード大作戦……………	5	●ヒマラヤに関する質問と解答……………	17
●H A J ヒマラヤ集会……………	7	●ヒマラヤ学入門 その40……………	18
●H A J アフガニスタン登山隊……………	8	●日本から・ヒマラヤから……………	19
●インドの北辺境〈1〉……………	10	●新刊・旧刊……………	20



第6回東日本ヒマラヤ研究会

〈インド・ヒマラヤ会議〉

6月26日～27日 宇都宮で開催

要 項

〈主催〉 日本ヒマラヤ協会（H A J）
〈後援〉 栃木県山岳連盟
〈期 日〉 1976年6月26日（土）～27日（日）
〈場 所〉 宇都宮市「くろかみ荘」公立学校

〈参加者〉

- (1) ヒマラヤに関心を有する者。
- (2) 講師、パネル・メンバー。

〈参加申込〉

別紙申込書に記入の上、申込金 3,000円を添えて下記へ申込んで下さい。現金書留で送金のこと。申込みなく当日の参加はお断りします。

※申込先

〒321-32 宇都宮市

館野秀夫

〈申込期限〉

若干名の追加申込を受けますので大至急申し込むこと。不参加となっても申込金はお返し致しません。（報告書の送付をもって代えさせていただきます）

〈参加費〉 9,000円（但し、報告書代を含む一切の経費）当日、申込金との差額を納入すること。

〈その他〉

- (1) 参加人員は80名で締切りますので早目に申し込むこと。
- (2) 当日、各種資料を特別価格で頒布します。
- (3) スライド上映を希望する方は予めお知らせ下さい。
- (4) 76年以後に計画をお持ちの方は計画書を

持参して下さい。（90部）

- (5) 講師、パネラーについては確定後、ニュースとして参加申込をされた方に配布します。

〈日 程〉

※6月25日（金）…前夜 18:00～

有志懇談会（情報交換、懇親）

第1日 6月26日（土）

- 8:00～9:00 受付
9:30～10:00 開会。オリエンテーション
10:00～10:30 最近のインド・ヒマラヤにおける外国隊の活動
10:30～12:00 〈地域研究〉
1 東部ヒマラヤ地域への誘い
2 サセル・カンリ山群
3 シッキム・ヒマラヤ（カンチェン
ジュンガを中心として）

12:00～13:00 昼食。事務連絡

13:00～14:30 〈記念講演〉

ナンダ・コットの思い出

竹節作太氏

14:30～14:45 休憩

14:45～19:00 インド・ヒマラヤ登山隊報告
（6隊、スライド及映画。1隊40分）

19:30～21:00 ディナーパーティ

21:00～ 情報交換会

カシミール、ラダック、ガルワール、
東部ヒマラヤ、インド一般

第2日 6月27日（日）

8:15 事務連絡

8:30～12:30 総合パネル討議

インド・ヒマラヤ登山をめぐる
（パネラーはインド・ヒマラヤ遠征
経験者及学識者により構成）

12:30～13:00 記念撮影。閉会

※専門集会 13:00～16:00

- (1) H A J 専門研究会 (東部ヒマラヤ研, ラダック研, ワハン研, EXP 研, 他)
 - (2) H A J グランドファミリーツアー打合せ
 - (3) H A J 15周年記念事業検討会
- ※懇親山行 6月27日 16:00~6月28日15:00
 「知られざる日光を訪ねる会」
 一日光の余り知られていない文化財, 遺跡,
 自然を探勝し, また参加者相互の親睦を図
 るために行なうー
 会費 4,000円 (宿泊費のみ) 自由参加

知られざるインドの16mm映画

「ガルワル山麓の旅」「世界の屋根を行く」の
 2本のカラー16mm映画を会期中に上映します。
 各40分もので, 事情があってこれまで公開
 していなかったものですが, 特に, 今回のイ
 ンド研究会のために上映します。ご期待下
 さい。

総 会 報 告

15周年記念事業・法人設立準備など承認

4月4日午後1時15分からH A J東京事務所で
 会員19名出席のもとに開催され, 次のようなこと
 を承認, 決定した。

1 昭和50年度事業報告 (増田専務理事報告)

(1) ヒマラヤ集会

札幌, 東京, 名古屋で毎月1回定例会を
 開催した。広島で1回開催した。

(2) ヒマラヤ研究会

イ 第4回ビスタリークラブ

5月3~5日 於愛知県豊根村

ロ 第5回東日本ヒマラヤ研究会

6月8~9日 於青森県八戸市

ハ 秋のヒマラヤ集会

10月10~12日 於岐阜県白川村

(3) 親睦山行

イ 第4回ビスタリークラブ開催時は茶臼岳
 (愛知県)

ロ 第5回東日本ヒマラヤ研究会開催時は八
 甲田山 (青森県)

ハ 秋のヒマラヤ集会開催時は白山 (岐阜県)

(4) 出 版

イ 「ヒマラヤ」第42号~52号 (月刊)

ロ 第4, 5回東日本ヒマラヤ研究会報告
 (ヒマラヤを歩きそして登るために)

ハ カシミールの街と山

ニ ネパールへの旅

ホ 秘境小チベット・ラダック

ヘ ヒマラヤの桃源境

ト シェルパリスト第2版

チ インド・ヒマラヤ帰国報告書

リ 会員名簿

(5) ヒマラヤ登山

カシミール・ヒマラヤ登山隊 (登頂不成功)

ガルワル・ヒマラヤ登山隊 (バムチュ
 6303m, リシパハール6992m, サーフミナ
 ル6911mの3峰に登頂)

(6) ヒマラヤの旅

スリナガル, ラダック, ネパールへ行な
 った。

2 昭和51年度事業計画 (岩水新専務理事報告)

(1) ヒマラヤ集会

札幌 (奇数月) 東京, 名古屋で毎月1回定
 例集会を開催する。

その他各地で開催する。

(2) ヒマラヤ研究会

イ ビスタリークラブ

5月29日~30日 愛知県犬山市

ロ 第6回東日本ヒマラヤ研究会

6月26日~27日 栃木県宇都宮市

ハ 秋のヒマラヤ集会

10月9日~11日 長野県, 八ヶ岳山麓

(3) 親 睦 山 行

上記研究会, 集会等の開催時に併せて行なう。

(4) 出 版

イ 「ヒマラヤ」第53号~64号 (月刊)

ロ ヒマラヤガイドブック「中央アジア」(植

竹、堀内) 昭和52年3月発行予定

ハ 第6回東日本ヒマラヤ研究会報告

ニ 1973年カンジロバ隊報告書

ホ 1974年ラムジュン隊報告書

ヘ 会員名簿

(5) ヒマラヤ登山

アフガニスタン登山隊(ワハン7~8月)

アッサム調査隊(12月~52年1月)

(6) ヒマラヤの旅

H A J 10周年記念ヒマラヤファミリーツアー

カシミール, ガルフル, ネパール, ビルマ, その他。

(7) H A J 15周年記念事業

ヒマラヤとシルクロード大作戦, 実行準備委員会・略称(H & S Plan)(仮称)を発足させる。

準備委員一沖, 稲田, 鈴木, 佐藤, 藤井

(8) Exp 研, ワハン, ブータン, チベット, 東部ヒマラヤ, ラダック, 研究会, 専門部会の研究活動

50年度決算及び51年度予算(沖)

(単位, 円)

	昭和50年度 予 算	備 考	決 算	備 考	昭和51年度 予 算 案	備 考
収 入						
入 会 金	250,000	2,500×100名	232,500	2,500×93名	250,000	2,500×100名
会 費	2,200,000	4,000×550名	2,188,000	48年度 1名 49年度 21名 50年度 559名 50年度追会費 513名	2,600,000	4,000×650名
広 告	360,000	100,000×3社他	401,000		360,000	
雑 収 入	20,000		65,880	利息, 集会収入	50,000	
運 営 基 金 より 振 替	0		290,000		0	
合 計	2,830,000		3,178,154		3,260,000	
支 出						
印 刷 費	960,000	80,000×12	1,380,000		1,400,000	「ヒマラヤ」12ヵ月他
旅 費	150,000		135,850		150,000	理事会他
集 会 費	50,000		62,836		50,000	
事 務 所 費	120,000		82,500		150,000	12,500×12ヵ月
電 話 費	40,000		43,840		40,000	
会 議 費	20,000		14,344		15,000	
調 査 費	20,000		25,060		25,000	
広 告 費	60,000		38,000		40,000	
文 具 費	130,000		159,910		150,000	スライド映写機・ロッカー他
通 信 費	500,000		764,540		800,000	
慶 弔 費	220,000		203,000		20,000	
上 部 団 体 費	6,000		6,000		6,000	東京都岳連
シエルバリスト発行費	20,000		23,345		0	
名 簿 発 行 費	130,000		113,600		180,000	
招 待 補 助 費	50,000		57,135		50,000	
予 備 費	30,000		0		19,000	
雑 費	12,000		220		15,000	
人 件 費	240,000		67,224		120,000	東京・名古屋, 5000×12ヵ月
ニューデリー事務所費	72,000		0		30,000	
合 計	2,830,000		3,178,154		3,260,000	
次 年 度 繰 越			0			

特 別 会 計

〈出版関係〉（単位、円）

	当初在庫	寄贈	売上	欠損	残部	収 入		支 出		
						売 上 金	広 告 他	印刷費他	出版基金	運営基金
第 3 回 東 北 研 究 会	65	0	59	6	0	60,800	0	0	60,800	0
第 2 回 東 北 研 究 会	56	0	48	8	0	35,900	0	0	35,900	0
ネ パ ー ル の 旅 報 告	66	0	61	5	0	53,900	0	0	53,900	0
ワ ハ ン 研 究	62	4	55	3	0	44,000	0	0	44,000	0
チ ベ ッ ト と ラ ダ ッ ク	118	0	33	0	85	27,400	0	0	27,400	0
シ ョ ル バ リ ス ト 第 2 版	500	90	58	0	0	47,120	0	132,500	- 85,380	0
カ シ ミ ー ル の 街 と 山	500	80	95	30	295	44,340	130,000	310,000	-135,660	0
ヒ マ ラ ヤ を 歩 き そ し て 登 る た め に	1000	42	79	0	879	181,580	0	1,045,000	-363,420	-500,000
ネ パ ー ル の 旅	1000	28	12	0	960	7,140	0	250,000	-243,360	0
イ ン ド ヒ マ ラ ヤ 帰 国 報 告	500	120	54	0	326	70,900	0	130,000	0	- 59,100
小 計						573,080	130,000		+222,000△ -827,820**	
合 計	3867	364	554	52	2897	703,080		1,868,000	-605,820	-559,100*

注：「秘境小チベット・ラダック」「ヒマラヤの桃源境」「Expedition I」はA—(a)項で出版したのでHAJの会計に入れない。

〈基金関係〉（単位、円）

	50年度まで	収 入	支 出	支 出 内 容	残 高
ヒ マ ラ ヤ 基 金	200,000	1,200,000	559,100*		
			⊗ 250,000	出版基金へ貸出し	
小 計			809,100		590,900
運 営 基 金	292,154	0	290,774	一般会計振替	1,380
出 版 基 金	282,146	222,000△	827,820**	出版へ貸出し	
		借入金⊗	13,980	シュルバ1版	
		250,000		赤字分へ	
		資料売上手数料			
		137,600			
小 計	282,146	609,600	841,800		49,946

〈Delhi office〉

収入	122,800	6 隊分使用料
支出	122,707	備品 13,250
		家賃 56,000
		移転 53,457
残高	93	

〈監査報告〉 日本ヒマラヤ協会の会計は帳簿の記帳、金銭の出入などすべて正常におこなわれたことを報告する。会計監査役一岩水竜峰、藤田昌平

〈会則変更〉 『 』のように変更。

（第1条） 名称を『日本ヒマラヤ協会』とする。
英語は『Himalayan Association of Japan 略称HAJ』とする。

（第2条） 事務所を『東京都中野区中央3丁目45-18 沢本ビル1F』におく。

（第17条） 会計年度を『9月1日をもって始まり翌年8月31日に終了する。』

なお、上記の会則変更の時期は現在第3種郵便

物の申請中などのこともあるので、会長および常務理事に一任する。それまで、略称として『日本ヒマラヤ協会』『HAJ』を使用する。本年の会計年度に限り、51年4月1日より52年8月31日とする。

〈役員選出〉 任期は会長、副会長は53年8月31日まで、会計監査、理事は54年8月31日まで。

（会長）柴田金之助（再任）（副会長）善行久親（再任）

(専務理事) 岩水竜峰※

(理事) 稲田定重 (インド・東北)

山倉洋一 (Exp・東北) 矢野郁雄 (ブータン・関

西) 藤井毅 (東部ヒマラヤ・関東)

大崎正信 (ネパール・北海道)

山森欣一 (カシミール・関東)

黒沢文代 (ビスタリー・関東)

佐藤優 (ワハン・関西) 久保幸治※ (装備・中部)

内田嘉弘 (パキスタン・関西)

植竹清孝 (都岳連・関東) 堀内立三 (チベット・関

東) 近藤龍良 (ツアー・関東) 小林英見 (関東)

B・ランジャン (ネパール) A・フィダ (インド)

(事務局) 沖 允人※ (名古屋) 鈴木康志※ (東京)

(会計監査) 増田秀穂 松本香代子

(敬称略, ※印は常務理事)

〈退役役員〉

空昌昭, 加藤彰, 阿部淳, 浜敏, 橋本広, A・ク

ワジャ, 藤田昌平。(長い間ありがとうございます。)
ざいました。厚くお礼申し上げます。)

任意団体から法人への格付けは本年度中に準備
を急ぐことが決定された。50年度に値上げした会
費収入をもってしても財政事情は容易でないが、
「ヒマラヤ」の第3種郵便扱いに努力すること、
一人の会員がもう一人の新規会員(購読者)を獲
得するキャンペーンを展開すること、事務合理化
などにより維持させることになった。なお席上本
年度のワハン隊員が紹介され、有田隊長から挨拶
があった。終了後ガルワール隊のスライドが上映
された。 ※出席者。 沖允人, 増田秀穂, 山倉
洋一, 阿部淳, 近藤龍良, 佐藤優, 松館正義, 松
田要悦, 館野秀夫, 植竹清孝, 有田豊, 小島守夫,
脇田治, 寺村重一, 村上秀三, 角田不二, 林清剛,
鈴木康志, 稲田定重

◇ 創立15周年記念 ◇

~~~~~ 砂に埋まれた歴史と世界の屋根 ~~~~~ 計画 ヒマラヤとシルクロード大作戦！

日本ヒマラヤ協会の15周年記念として、この雄
大というか、無謀というか、また、ヒマラヤニス
ト、西域病患者の夢を実現するものといおうか、
ヒマラヤを登りながらぐるとシルクロードをひ
とまわりしようという計画を建てました。期間は
約2年。参加者 180余名。費用約1億円。

参加資格は日本ヒマラヤ協会会員であれば誰で
もコースとパーティに応じて参加できる。子供、
結構！老人も歓迎！女性はもちろん大歓迎！

〈コース〉

中国の北京を出発したH A Jキャラバン車は
トルファン(敦煌)からコータンに入りタクラマ
カン砂漠に入ってヤルカンドに抜ける。別動隊は
チャムドからラサを通り、エベレストの北面にせ
まるというチベット経由。

この隊は本隊とヤルカンドで合流する。

天山山脈を越え、ソ連領中央アジアのアルマアタ
へ出る。3月に北京を出発した隊がここへ着くと

もう7月になっている。1年前の踏査と登山の隊
がパミールの高峰、レーニン峰に登っている予定
なのでこのあたりの事情はよく分っている。

—— 冬のイラン、トルコへ ——

一路西へシルクロードを走り、タシュケント、
ブハラそしてイランに入る。“イラン富士” ダマ
ベンド山に登頂し、テヘランに出る。

ここからトルコのノアの箱舟が流れ着いたとこ
ろの伝説のあるアララット山に冬期登山する。

テヘランに帰り、アジアハイウェーをアフガニ
スタンへ走る。冬のアフガニスタンはまだ格別の
エキゾシズムがただよ。

カイバル峠を越えパキスタンに出る。不老長寿
のフンザ王国を訪ねる。

ラホールからデリーに出る。登山隊はカシミ
ールの名峰、ヌンやサセルカンリに少人数短期登頂
を試みる。

ラダックやザスカールの秘境を小人数パー ティ
に分れて踏査する。

——ネパールの8000m 峰登頂——

プレモンスーンに8000m 峰をねらう。この登山の終ったあともう一度、インドに出て、ガルワルヒマラヤの山で速攻による登山をおこなう。

2度目の正月をアッサムでむかえる。ブータンから再びアッサムへ出、困難なルートを通してビルマ北部から南下し、ランゲーンへ出る。そして、タイのバンコックへ出てここでこの長い長いキャラバンを終了する。

〈パーティ〉

全域踏査隊は4～15名 マイクロバス1台ジープ2台を使いリレー式に踏査。

この間、このキャラバン隊に合せて図の←→で示している地域と期間に10～15名の小パーティを日本より送り出し、7日～3ヶ月の間行動を共にする。別動隊の登山隊もこの時期に合せる。

〈費用〉

一人一率60万円位とする。ただし、登山隊はプラスαをする。事前準備費も含まれる。

全区間をA～Eに分けて準備委員が計画を練る。

〈何をやるか？ 目的は？〉

- ① ヒマラヤとシルクロードの車による1周
- ② 8000mの小人数短期登山
- ③ 未知の山の登山へ速攻。
- ④ 冬のアフガニスタン、雪のシルクロード。
- ⑤ アジアハイウェイの調査、車と人との熱意。
- ⑥ ヒマラヤとシルクロードの人、自然、虫、動

物、植物、水、……………。

など参加者が専門に応じて何かをやってみる。ボヤークとあの広大なチベット高原を眺めるだけであってもよい。とにかく、面白いやりがいのあるものにみんなできてみたいものである。かしい人には出来ない大きいことを。かといつてマンザラ馬鹿ではもちろん不可能なことを。

〈計画のすすめ方〉

1976年（今年）の6月末の東日本研でこのプランに対する自由討論会を開く。ここで出た意見や希望を盛り込んで準備委員が、基本構想を立てる。そして秋のヒマラヤ集会で第1次案を発表する。15名ほどの第2次準備委員会を発足させる。1977年の6月頃に、第2次案を立てる。以下はこの案を練りなおすとともに現地調査を充分におこなう。

——・——・——・——・——・——・——
実に難問が山積みしているような気がします。そして、何か大きい夢を見ているような気がします。しかし、やってみようではありませんか。すでにこの7月にはH A J ワハン隊が出発します。そして、8月にはH A J のカシミール・ツアーの人たちもカシミールとラダックへ旅立ちます。もうこのヒマラヤとシルクロード大作戦は動きはじめているのです。

皆さんのアイデア、ご意見を聞かせて下さい。
事務局はH A J 東京事務所 鈴木康志です。

〈O〉

〈参考文献〉

とりあえず下記のものを。

「アジアハイウェイ」佐藤清 日経新書 480円

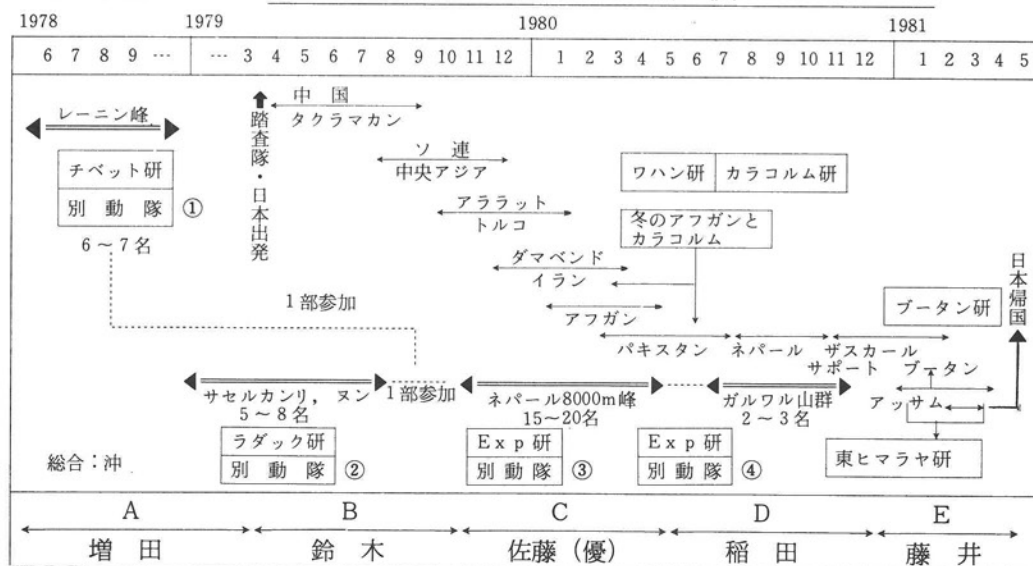
「西域」羽田明 河出書房

「シルクロード」加藤・斎木 駸々堂出版 500円



〈日程案〉

ヒマラヤとシルクロード大作戦(H&S Plan)



◆◆◆ H A J ヒマラヤ集会 ◆◆◆

〈東京定例集会〉——予定——(無料)——

毎月第4金曜日 18時30~20時

毎月第1金曜日は、自由集会です。ヒマラヤに関する個人的な相談、ご友人との打合せなどにH A J東京事務所をご利用下さい。なお、毎週金、土の13時~20時まで事務所はご利用できます。

6月25日 アフガニスタンの旅

7月23日 カシミールの街と山

H A J出版の上記の本(600円)持参のこと

8月は休み

9月3日(第1金曜、24日は休み)ガルワル山麓

10月22日 ネパール・トレッキング情報

11月26日 アッサム、ビルマ、ダージリン

12月3日(第1金曜、24日は休み)

ネパールの旅、トレッキングのガイド

H A Jの「ネパールの旅」(600円)の本持参のこと

52年1月28日 アフガニスタンの山(ワハン隊速報)

2月25日 中央アジアの山々

3月25日 インド・ヒマラヤ情報

〈北海道定例集会〉——予定——お茶代・実費——

毎月第1月曜日 18時頃から、札幌市北1西4棟向 喫茶「ねむの木」の3階特別室でおこないます。奇数月定例、偶数月自由集会

問合せ先 大崎正信理事

〈名古屋定例集会〉——予定——(無料)——

毎月第2金曜日 18時30~20時

於: 名駅前 ホテル・ニューナゴヤ 747号

(7階) エア・インディア名古屋

6月11日 秘境ラダック

7月9日 カシミールの街と山

H A J出版の上記の本(600円)持参のこと

8月は休み

9月10日 ガルワル山麓の旅

10月は休み

11月12日 アッサム、ビルマ、ダージリン

12月10日 ネパールの旅アドバイス

H A Jの「ネパールへの旅」(600円)の本持参

52年1月21日(第3金曜、14日を変更)

アフガニスタンの山 (ワハン隊速報)

2月18日(第3金曜、11日を変更)中央アジア

3月11日 インド・ヒマラヤ情報

〈大阪集会〉——(無料)——

6月12日 17時~19時、ヌン登山隊報告、ラダック

於: 大阪市労働会館(国鉄大阪環状線森ノ宮駅

下車、日生球場東隣) 担当 田中重義

〈京都集会〉6月12日(土) 午後1時~3時 カシミールの山とラダック、東山会館

〈記念スペシャル・トレッキング〉

山 里 寿 男画伯とともに アンナプルナ内院へ

H A J 創立10周年を記念して、スペシャル・トレッキングを企画しました。山里寿男画伯とともにアンナプル南面の雪と氷の美しく、そして厳しいヒマラヤを楽しい仲間とトレッキングします。食事やシェルパ・ポーターなどをお世話します。

出発日 51年12月26日

第1日 東京、羽田空港より空路ニューデリーへ。

第2日 デリーより空路カトマンズへ。

第3日 カトマンズにてトレッキング許可取得、

第4日 カトマンズより車にてポカラへ。

第5日 トレッキングへ出発。ポカラよりペディ。

第6日 ペディよりビレタンティへ。

第7日 ビレタンティよりガンドルクへ。

第8日 ガンドルクよりチョムロンへ。

第9日 チョムロンよりドバンへ。

第10日 ドバンよりアンナプルナBC(約3,700m)。

第11~17日 スケッチとトレッキング。

第18日 ドバンよりチョムロンへ。

第19日 チョムロンよりガンドルクへ。

第20日 ガンドルクよりビレタンティへ。

第21日 ビレタンティよりノウダラへ。

第22日 ノウダラよりポカラへ。

第23日 ポカラ・ペワ湖にて休養

第24日 ポカラより車にてカトマンズへ。

第25日 カトマンズ 滞在、荷物の整理、バザー

第26日 カトマンズ ルでのお買物を楽しんで下さい。(オプショナル・ツアー、カカニの丘、山岳フライトなど)。

第27日 カトマンズより空路東京へ。通関後解散。

募集人員 20名 締切 6月末 費用 468,000円

HAJアフガニスタン登山隊1976

———コイ・パミール (6288m) , 他へ———

かねてから入域困難なアフガニスタン・ワハン地域について「ワハン研究会」が主体となって研究を行なってきましたが、このほど派遣のメドもつき、同地域に登山隊を送ることになりました。

計画にもあるとおり、この地域は複雑な政治情勢から充分解明されておらず、数多くの未踏峰が存在し、人文的にも非常に興味あるところでした。今回のH A J隊は関係方面の特別の配慮により実現に至ったもので、その成果が注目されています。本登山隊に対する会員各位の御支援をお願いします。

趣 旨

数年前より日本ヒマラヤ協会では「ワハン研究会」を作りワハン地域の学習会を行なってきました。近年になりワハンへの入域の見通しが明るくなり我々は目ざす山をワハン中央部に求めました。この山域にはコイ・ヒラル (6281m) , コイ・パミール (6288m) そしてコイ・マルコポーロ (6174m) などの山々があり、それらは、北のパミール河、南のオクサス河にはさまれた地域にあり、いずれも河は西方に流れています。この地域は一般にはアフガニスタン領の大パミール

として、また奥地(東方)のソ連、中国の国境の方は小パミールとして知られております。

しかし、ワハンおよびアフガン領パミールは、主として政治情勢のために国境が遮閉されており、また長い間入域が閉ざされていたため旅行の最も困難な地域のひとつでありました。1970年代に入りいくつかの登山隊や調査隊がこの地域に入るのに成功しているにすぎません。

我々は科学的に充分解明されているとは言えないこの地域を、自分たちの足で踏査し、隊員のそれぞれの分野に従って調査と研究を行なってきたと考えています。そしてその成果を少しでも還元出来れば幸いと思っております。

計 画 概 要

- (1) 隊の名称：アフガニスタン登山隊 (H A J 1976) Wakhan Expedition of H A J 1976
- (2) 踏査地域：アフガニスタン共和国、ワハン地域
コイ・ヒラル (6281m) , コイ・パミール (6288m) , コイ・マルコポーロ (6174m)
- (3) 目 的：登 山

- (4) 踏査日程：1976年 6月28日：羽田発北京經由
 7月3日：カーブル着
 7月10日：カーブル——クンドーズ——フ
 ↳ ャイバザード——イシカシム——
 ↳ カライパンジャ
 16日：——イシク
 7月18日～8月10日 登山期間
 8月20日：カーブル着 8月29日：カーブ
 ル発 8月31日：羽 田 着

(5) 隊の構成

隊長：有 田 豊

登山歴：1970年7～9月アフガニスタン：ミ
 ルサミール峰，パキスタン：ファラ
 クサル峰，インド：コラホイ峰に
 副隊長および渉外1973年6～8月ア
 フガニスタン：コーイバンダコール
 峰とシャフラディ峰，隊長

登摩隊長：松 田 要 悦 （装備）

登山歴：1971年5月パンジャブ・ヒマラヤ：
 ディオティバ峰

隊員：佐 藤 優 （渉外・会計）

登山歴：1964年より大峰，御岳山，乗鞍岳，
 大日岳，北ア前穂，富士山，蔵王な
 どの積雪期登山



隊員：松 館 正 義 （輸送）

登山歴：1971年5月パンジャブ・ヒマラヤ：
 ディオティバ峰登頂

隊員：村 山 延 久 （記録）

登山歴：1971年5月パンジャブ・ヒマラヤ：
 ディオティバ峰

隊員：村 上 秀 三 （写真記録）

隊員：脇 田 治

登山歴：1974年3月フィリピン：マウンテン
 プロビンス
 1975年8月フィリピン：セント・ト
 ーマス

隊員：寺 村 重 一

登山歴：1973年6～8月アフガニスタン：コ
 ーイバンダコール峰

医師：林 清 剛

(6) 総経費 7,500,000円

(7) 留守本部：〒468 名古屋市天白区一ツ山

(8) 現地連絡先：Wakhan Expedition of HAJ
 1976 c/o Embassy of Japan
 Kabul, Afghanistan

(9) 遠征隊事務局：〒457名古屋市南区鯛取通

インドの北辺境〈1〉

〈スカルドウからレーへ〉

フレデリック・ドリュー

(The North Barrier of India by Frederic Drew 第16章より)

スカルドウからラダックの中心地レーへはほぼ320kmの道で結ばれている。しかし、この道はあまり利用されず、徒歩の旅人はめったに横断しないルートである。寒いラダックやチベットの国々で大変好まれ、需要のある果実や、干したアプリコットの甘い産物をこの道を通して運んでいる、がまん強いバルティス人にとったり出会うことがあるくらいである。バルティスタンでよい値で売れる工業製品をいっぱいもった人たちが、また、見知らぬ国へ出稼ぎに行き帰ってくる人たちに出会うこともある。

インダスの谷は二つの街に通じてはいるが旅人がインダス川から離れシャヨーク (Shayok) のコースに従い、そのあとで約5200mほどの峠を越え、さらに大きな山脈の一つを越え、インダス川の川岸に再び達するという、川に沿った部分の道は非常にきびしいものである。このインダスの谷の道をたどり、どのような変化がだんだんとおこってくるかをたどってみることにしよう。

スカルドウの巾広い谷はすぐに峡谷となってしまう、川は岩壁のゴルジュに閉じ込められたようになり、道は急な川岸と高い山脈にまでずっと続く支尾根にそっている。山側に沿って続いている訳である。しかし、ときにはそれは砂の沖積土を横切ったり、崩れ落ちた岩くづがごつごつした固まりになっているところを越えたり、基部を川の水で洗われている断崖の岩の小さい突起に、材木を見るからに不安定に渡して作った道を通ったりするのである。景色は常に岩壁のはてしない広がりやくづれた岩であるが、5～6km毎にある峡谷が少し広がったところに小さい村があり、その穀物やここで繁茂している果物の木々の葉などがわずかに旅人の目を楽しませてくれるのである。

これらの村のある地域は私がアルビアル・ファン (Alluvial fan) “沖積土の扇”と呼んでいるところに位置している。この“沖積土の扇”の正

確な意味を説明すると次のようになる。すなわち、支流が狭いゴルジュを抜けて広い谷へ流れ出る場合、山からけずり出した岩くずなどを運びおろし、峡谷の入口のところに扇のように推積する傾向があるからである。

この扇は合流点に先端のある低い円錐形の一部であり、数度の傾斜をもっている。斜面は半径方向に非常に規則正しくなっていて、その広がりには90mから数kmにもなることがある。推積物の厚さは平地または谷の底から先端までの高さで400～500mにもなることがある。

“扇”はしばしば削剝され、そのあとは表面が少しカーブして傾斜した広場になり、峡谷の直前で山側にくっつくようになる。この広場は普通低いところで流れ出す支流でできた小峡谷によって半分に分けられ、本流に面している崖のところまで達する。そこに住む人に関連して言えば全体であれ、削剝されたものであれ、この“扇”の重要さは、支流の水が灌漑に使われたりして永久的とはいえないが、かなりの土地が耕作できるからである。

このような“扇”とそれにつづいている村は川のこちら岸や対岸に数km毎にできている。傾斜した土地は人力で土手が作られ、丁度、果樹園の石垣のような役目のように、太陽光を反射するような方向に大きい岩を向け、小さいテラスのような畑になるように平らにならされている。

畑は沢山の穂の出た穀物や、果物が茂っていて、輝くような緑の葉が数kmの間、崩れかかった石や岩の他には目に入らなかった、夏の日の裸の山々の間のキャラバンのあとで、その苦労のむくいとして得られる木陰をさしのべてくれるように旅人の目に映るのである。

大きな村の一つである岩の上にあるカルタクショ (Khartaksho) はスカルドウやロンドウ (Rundu) の兄弟分の村のように政治的役目を失なった

土着のかつての為政者の居住地の一つである。ほんの少し登っていくとバルティスタンの境界を越え、ラダックの領域に入ることになる。政治的な境はガルコン (Garkon) とダー (Dah) の村の間にあり、地図で示される色分けは、この部分に生じている民族学的な変化を示すが、物理的なものはそんなに急激な変化をする訳ではない。

インダス谷の底は狭く、岩のゴルジュになっている。流れは渦まいてはいるが表面は波立っていない。あるところでは約20mであり、またあるところでは15m というように川巾の狭いところを流れるため川は非常に深い。ゴルジュの側壁はほとんど垂直でその上にはさらに急斜面があり、たいていは崩れた崖になっていて土はなくずっと高いところまで続いている。岩はすべて花崗岩である。

この断崖をこえて行く道は大変難かしく、空荷の小馬なら何とか通過できるが、荷をつけた馬はここを通ることはできない。川の両岸はどちらも同じような様子である。道路の悪絶さがこの谷にある村々を孤立させ、お互の交際をはばんできたのである。

谷の一番低いところはラダックで一番暖かいところでもある。川の標高は約2700m あるが、夏にはかなり暑い。雲でかくされていない太陽はむきだしの岩に光線をあてて熱するので、ごつごつした道を通って行く旅人は片側は太陽の直射を受け、反対側は地上からの強いふく射熱にあてられ、閉じこめられている空気が熱くなり、耐えがたいものとなる。しかし、この熱にやられる苦しいところを数kmすぎると裸の岩のまっただ中にあるが、輝くような緑の穀物が茂り、沢山の果樹が影を投げかけている小さな村に到着する。

〈ガルコンとダーの村〉

ガルコン (Garkon) は大変奇妙な場所にある。大きな川の断崖の分れたところで平坦な水床の端というか、とにかく非常にせまい細長い土地であり、片側には真直ぐに落下している滝がある。反対側の垂直な崖はせまい場所にオーバーハングしている。そこは太陽のふく射熱を受けていて夜中でさえもその熱気はなくならない。水は高い山から流れてきた溪谷から畑にひかれています。リンゴ、すもも、桑の実、ぶどうが穀物と一緒に狭い

場所につくられている。湿気と暖かさの組合せがうまくいってよく茂っている。

ガルコンから次のダー (Dah) という村へ進んでいくと前に記したようにバルティスタンからラダックへ入って行くのである。バルティスタンは昔は平和な近隣諸国を好んで襲撃していた。

開拓者の村ダーの家々は団塊となり、お城のようになって村を守っている。二方は急な断崖で、他の二方は囲みの入口を守備するのに都合のよい塔のある壁になっている。現在ではすべて一つの政府の支配下にあり、完全に平和となり、住居も散在するようになっていく。しかし、冬には遠隔の家や部落の人たちは古い囲いの中に一緒になって暖く陽気に住んでいる。壁の中にある土地にはほとんど屋根がついており、裏通りになる空地はほとんどなく、家から家へと行くときは隣家の部屋を通して行くのであり、とにかく全体が奇妙な入りくんでごちゃごちゃした建物になっているのである。

インダス谷に沿って横たわっている村の周辺には、右や左から合流してくるいくつかの枝谷がある。この枝谷の入口は狭いものであるが、ここから数kmいくと耕作され土地といくつかの小屋がある。より高地にあるこれらの部落は本谷の村にくらべて明らかによりきびしい気候に耐えているのである。ここには岩の間に筋のようになった耕作された土地があるが、果樹、柳、ポプラなどはだんだん姿を消している。耕作地の上方で峡谷は丘の中心部にむかって岩の荒地の中を続いている。その右岸はときには峠に、あるいは人間がとうてい手がかりがなくて達することのできない岩稜など、陰阻で手におえなくてとても人間の足跡をしるすことのできないところになっているしー山脈の源流地帯に達する。

インダス谷のアチナタン (Achinathang) はそれほど閉じ込められたところではなく、その村に沿っている道は馬に乗って快適に通れるほどある。

アチナタンは小さくて美しい村であり、水面から約60mの川の沖積土の上にある平原である。このすぐそばの約36mの高さに、かつて、川の流れて運ばれたどろどろの沖積土があり、そこに浅い穴があり、その穴はバルティの金採掘者が土面を掘り、金を流し出すために水のところまで運んでいたときのものである。数km毎に川岸の両岸に耕

された土地がある。その1つは狭い平面に長さ1.6km、巾わずか45mというずっとつづく筋のような畑である。ときにはスキルビィチャン (Ski rbichan) の村のように巾広くなったりする。その上の各土地は面積に比例して120～160アールに一軒の割合で家が集まっている。これらの白い家は、あたりの裸の土地と対称的に半分は木の葉にかくれており、緑の畑が広がり、どの小さい村も魅力的なところとなっている。

サナチャ (Sanacha) からハヌ (Hanu) の村にかけての住人はダルド派の仏教徒である。アチナターンから上流の村から人々は民族的にも言葉の上からもラダック人になってくる。ラダック人のことについては別の機会に述べるが、この土地のラダック人は成長がよく、レーの近くのラダック人よりも背が高い人が多い。このことはおだやかな気候であり厳しくない生活をしているからだと思う。

〈スリナガルからの道に合流〉

インダスのさらに上流でカルシィ (Khalsi) に着く。ここはカシミールからの道がインダス谷に出合うところなので、ここからは道は合して一つになる。まだこれから4日間の旅が続くのである。インダス川が18～21mの巾にせばまっているカルシィのところを木の橋で渡る。橋は高い岸にある城で守られているので橋からの道は半分は城に沿うようになっている。カルシィの村は川から約450m高いところにある。そこには支川から水を引いて耕している段々畑があり、穀物や果樹がよくというより、むしろ豊かに育っていて、標高3300mを超えているのにクルミやアプリコットが熟している。カルシィからレーへ行くのには2つのルートがある。1つは川から500mほど高い平原を行くものである。谷を左へ登って行くと外側は低い丘が連なり内側は高い山脈になっている高原がある。そのコースに出るふもとは高い山脈を形成されていて、その低いところが谷を横切ってこの高原をさえぎっているので巾広い土地に分けられているのである。豊富な花崗岩の山脈はインダスの谷を長大な支流シャヨーク (Shayok) に分け、この高原の北方の境になっている。このルート的大部分ではごつごつして裸のかっ色と茶色の崩れそうな岩でおおわれた丘の支脈が見えるだけである。

ときには大きな中央山脈を谷から見上げることもあるが、そこも同じようなもので、ときに新雪がついているくらいである。よく知られているヒミス・シャクパ (Himis Shukpa) を通過する。この名は石ころの多い土壌に育った百本の西洋杉または大きな“シャクパ”の木立にちなんでいる。

これらの木のいくつかは周囲が2m～2.5m以上もあり、上に行くほど細く上がり、高さは約20mにも達している。この木立は神に守られておりこの木を冒瀆したものは病気や不幸になるといわれている。ヒミス・シャクパには7世紀の終りにラダックに侵入してきたソクパス (Sokpos) によって建立された城または塔が残っている。前に記したように彼はこのような塔を多くの場所に建てたが、このヒミスの城はそれらの一番西方にある。

カルシィの近くで分れた二つ目のルートはバズゴー (Bazgo) の村で再び合している。谷のルートに沿っていくと大きい村を通過するが、数は多くはなく、1日のキャラバンで2つあれば多い方である。ヌルラ (Nurla) とサスプール (Saspul) が通過する村の中では一番重要な村である。谷を囲む右岸 (レーに向って歩くと左側) の丘は他のルートを横切る川と高原の間にはさまっている2番目に高い山脈に沿っている。左岸の突出した山脈は谷から600mくらいの高さにあり、標高5500～5800mのところどころに1800mから2100mも高くなった山脈の枝尾根の末端になっている。

〈冬の旅〉

夏に荒々しい石の道や強い太陽の光のもとで岩の斜面を徒渉で苦労して登って行くカルシィの下流の谷を横断する旅についてすでに記述してきたが、この部分を私は冬と夏の両方とも通ったことがある。それはイギリスで経験したものよりもはるかにひどい寒さにもかかわらず、冬の旅の方がより快適だったと感じている。それは1月であった。乾いた粉雪はばらばらと降っていた。川はところどころで凍っていたので川を渡ることができ、どちら側の岸でも歩くことができた。ヌルラ (Nurla) の近くでは1.6～3kmの間インダス川の上を歩いていった。氷や雪によって道はより滑らかになっていた。小羊のコート、帽子、フェルトの靴下が寒さを防いでくれ、村々では遊牧民が歓迎してくれて快適であった。

—— 急 告 —— アッサム調査隊
参加希望者へ

昭和51年12月26日から、約1カ月間のアッサム調査隊を送り出す準備をすすめています。シッキム、アッサムへの特別入域申請のメ切日がせまっております。また、近日中にアッサムなどの要人を囲む会、資料配布などを兼ねた打合せ会を開きますので至急、東部ヒマラヤ研究会 藤井毅 東京都目黒区東山2丁目16-2-301 または H A J 東京事務所 鈴木康志までご連絡下さい。

山里寿男・山の画展

時・6月11日(金)~16日(水)

所・東京銀座松屋7階美術サロン

ヨーロッパアルプスと日本の山の画が出展されます。

※ 息子さんと昨年歩いた槍ヶ岳などが「岳人」の夏山特集号に載るとのことです。また年末にはH A J ツアーに同行していただけます。

ヒマラヤ閑話5

ヒマラヤの商人たち

水 野 勉

本の読み方というものもいろいろあるだろうが、好みのままに気楽に読むのが、ぼくにはいちばん適しているようだ。ときには緊張して読むこともあり、それでも一種の爽快さがあって楽しいが、自由勝手に読みすすむのもいいものである。最近、Haimendorf の 'Himalayan Traders' という本を読んだのも、そのような、ぼく流の気楽なやり方であった。それで、とてもおもしろかったのだ。どの辺のところがおもしろかったかを紹介したいと思う。

ハイメンドルフといえば、'The Naked Nagas' とか 'Himalayan Barbary' とか 'The Sherpas of Nepal' などでおなじみの人類学者であるので、その名を知っておられる方が多いと思う。はじめは、アッサム地方に住むナガ族の調査から出発して、戦後はネパールにその調査地域を移して活躍している。

今度の 'Himalayan Traders' (1975年) は、これまでの著書といく分ちがっていて、高所ネパールに住む人びとの経済生活を中心に書いたものである。辺境の山岳地域に住む人びとの生活を対象としているのは、いままでの仕事と連続している。高所ネパールといっても一部の地域、たとえば、京大の人びとのトルボ地方での調査のように、ごく小地域を対象としたものではなく、東部のアルン流域から西部のカルナリ流域とじつに広い範囲にわたっている。

前にも書いたように、どうせ気儘に読んだのだ

から、ハイメンドルフの報告の内容を詳しく紹介したり、あるいは批評を加えようなどという、大それたことをするつもりはない。ここで述べようと思うのは、ヒマラヤの山岳地帯に住む人びとの生活のことである。ここで述べられているのは、ネパールでも高所に住む民族、主としてチベット系の人びとで、グレートヒマラヤの北方にあって、チベット国境近くに住み、その経済生活の主たる形態は、チベットと低地ネパールとの間にあっての交易である。チベットから主として塩、織物などを買い、その代り、米、麦などを売る。低地ネパールからは、米、麦などを売って、その代り、塩、織物などを売るといった通商である。そのほかに家畜も交易の対象とされている。かれらにとっては、ヒマラヤという障害がその経済生活の根拠となっているのである。その障害があってこそ、かれらの活躍する舞台があるのである。

普通に、生活 'Life' というばあい、ぼくらは文化をも含めた広い意味にとるが、このヒマラヤの辺境に住む人びとのばあいは、主として経済生活のことである。いや、生活とはずばり、生計を立てるということであろう。もっとはっきりいえば、食うことである。タカリ族のように、すでに相当の産をなして都会へ出たものもあるが、基本的には経済生活である。シェルパの一部がやはり少しづつ生活に余裕を持ち、資本を蓄えつつあるが、これも同じであろう。ハイメンドルフは、この本で経済生活を主として述べようとしたわけで

はないが、このようにネパールの東から西まで広い範囲にわたって、住民の生活を書きつらねると、いやでも読者に‘生活’の重みを感じさせずにはおかない。少くとも、ぼくはそのことを強く感じた。考えてみれば、ぼくらの生活にしてもそのようなものであるが、何かもっと付属的なものがくっついているし、国家や社会が自分たちの経済生活の面倒をみてくれる、あるいはみてくれるべきだという安易な考えを持っている。

ヒマラヤの商人たちは、中国のチベット進入およびネパール国内における道路の整備により、塩の輸出入という大きな仕事を失ってしまい、生活を根本的にたて直さなくてはならないのであるが、それに対して国家の助力はないようである。つらい運命である。ヒマラヤという障害が和らぐにつれ、かれらの伝統的取引が失われていくのである。シェルパはいち早く、トレッキングなどの観光の仕事に乗り出せたが、他の人びとはどうするのであろうか。商人としての仕事をどうつづけていったらいいのか苦しんでいるのであろう。

ぼくらはヒマラヤというとき、登山、トレッキングあるいは学術調査という風に考えるのが普通である。それらと、このヒマラヤの商人たち——というより辺境のチベット系住民とっていいか

<1975年>

ク　ン　ブ　の　旅

1月12日　晴のち雪

絶好のフライト日和。抜けるような青空の中で眼下に段々畑を見ながら、乗客6人を乗せて飛行機は雪化粧のシャンボチェに着陸した。前半のトレッキングを、熊沢、大久保、永礼の諸氏とポーター、シェルパを含む10人で終えた後、1人でクンブにきたものの、不安でいっぱいだった。ポーターを雇うつもりが、交渉がうまく行かず困っていると、ホテルに泊まる事になっていた熊沢さんの好意で、ひとまず一緒にビューホテルへ行く事にした。

食堂の大きな炉はちっとも燃えず、いつまでたっても寒い。眼前にエベレストが思っていたよりずいぶん小さく、でもとても美しく見えていたが、やがて雲にかき消され、雪が降り出す。昼近くになって、フロントの慌しさが一段落したところで

もしれない——とをどう結びつけたらいいのか。自分の生活には飾りものが多すぎるという思いが、ぼくの胸に迫る。文化は生活に余裕がなければ生れこないのであるが、どうも一つびんとこない。

ハイメンドルフは別にこのようなことを書いているわけではない。しかし、かれが、ヒマラヤの人びとの生活を具体的に数字をあげて静かに述べているのを読むと、そういう思いが迫ってくるのである。著者は文化——芸術や建築や宗教については少しふれるだけで、詳しく述べようとしない。カルナリ川流域には独特な古い建築物が残っているはずであるが、ハイメンドルフはそれにはほんの少しふれるだけである。かれにとっては、現に生活している人びとが対象のようである。ぼくは民族学の本をあまりに自分流に読みすぎたのかもしれない。しかし、本の読み方にきまった方法があるわけではないので、こういう気ままな読者がいても、著者は許してくれると思う。

—— インドの旅行・登山の手続は ——

Mr. A. Fida. Trans Himalayan Travel & Tours　へ日本語でどうぞ！　ラダック、ガルワールetc.　½, Poloview Residency Road, Srinagar, Kashmir.

片　岡　喜　恵

相談に乗ってもら。荷物が小さい事（シュラフと着がえとパン少々）、高山病、言葉の問題などから、ポーターよりシェルパの方が良いだろうという事でシェルパを1人紹介してもらった。

雪が激しく降り出した中を、わがシェルパのミンマに荷物を持たせてナムチェに下る。彼の言う事に答えながら、視界のきかない雪の中でいよいよ1人だという思いと、夏山ぐらしか経験がないという事で不安は募るばかりだった。

ナムチェの泊った家は大きな家で、奥の部屋にコの字型にベッドが造りつけてあった。天井から吊り下がるたくさんのヤクの肉塊に仰天してしまつて、壁の古い小さなザックが近視の私にはコウモリに見えてしまつて、ミンマに笑われる。こんなガランとした真暗な部屋でヤクの干肉と一緒に寝るのは心細かったけれど、なるべく上を見ない

ようにして寝る。高度のせいか脈搏が随分速い。夜中に気分が悪くなり、ビニール袋を枕元に用意しておく。

1月13日 晴のち曇

気の進まないまま、朝食にパンケーキを焼いてもらう。頭痛のする様な気がしていたのに、食べるとおいしく気分もよくなる。この家には立派なトイレがあり、穴が2つあいている。おばあさんが水の入った缶を持って入ってきたけれど、缶を置くとすぐ出て行った。

再びシャンボチェまで登り、クムジュンへ向かう。ミンマに雪男を見た事があるかと聞くと、私の予想に反して見たと言う。大きさは私ぐらいでヒューと鳴いたそうだ。大事そうに毛を数本持っていた。宝物とでもいうところだろうか。でも本当かどうかは信じ難い。空には一片の雲もなく、山々は最高に美しい。ヒラリースクールの校庭の雪に足跡をつけながらクムジュンのミンマの家へ寄る。

彼の奥さんは美人で、ミルクティー、揚菓子、ミカンにチャン、ロキシ、それに昼食と色々御馳走してくれた。近くの田んぼの中にあるトイレに行くと、ミンマの息子や他の子供達が、ワイワイと付いて来る。透間だらけのトイレは床板を所所はがした恰好で、6人位は1度に間に合いそうだ。下は田んぼ。子供達は屋根の上に登ったり、透間からのぞいたり、石を投げたり大変な騒ぎ様。そんな事にはお構いなしであるが、田んぼの中でヒラヒラしている白い紙がやけに目に着いて、いつまで残っているのだろうか、この方が恥しかった。彼らは紙を使わないのでよく目立つ。のんびりと出発してナムチェより低いブンキの茶店で泊る。

1月14日 曇

体調は良好。持ってきたパンで朝食をとる。ミンマは朝からチャンを飲んでいる。

タンボチェで少し早い昼食を済ませ、ラリーグラスの林の中を、雪の積った道を滑らないように下る。ディンボチェに着いたのが昼の12時50分。なのにミンマは高山病になるからここで泊った方がいいと言う。不満だったけれど天候も良くなく、山も見えなからうとしぶしぶ承諾する。ダワという老人夫婦の家に行くと暖く迎えてくれた。2人共いつも手に数珠を持っていて、オンマニ……と思

い出したようにお経を唱える。ミンマは薪割りをしたり、食事の仕たくをしたり、まるでわが家にも帰った様に実にかいがいしく、よく働く。ここで泊ろうと言い張ったわけだ。ラム酒やチャンを盛んに勧めてくれる。一応は断りつつ飲む。どうやらチャンのファンになってしまったらしい。

1月15日 晴

めずらしい事には、この家には2階に金庫のような観音開きの戸の付いたトイレがある。でも朝はやはり外の方が気分が良いので、皆に気付かれない様に階下へ下りる。

今夜も泊めてもらう事にして、荷物を置いて出発。パンボチェの小高い所で、ヤクの群を眺めながら、スケッチなどしてみたけれど手が冷たくて思う様にならない。エベレストもローツェもローツェシャールも、最初に見た時と少しも変りない。改めてその大きさを感じる。

下の家で昼食にじゃがいもを食べる。食べ馴れた味のせいかととてもよく食べた。ミンマはやたらとチャンを勧められている。支払いをする時、いくらになるか分からないと言うのでミンマに決めてもらって20ルピー払う。随分高いなあと思っていたら、ティーをもっと飲んでくれと言う。ミンマにはチャンだ。2人共、無理矢理流し込む。もう何もいらない、高山病なんてものはあるのだろうか。

ゴンパでお決まりのごとく、雪男の頭を見る。ミンマがぜひこれを被って写真をとれと私の頭に載せた。気味が悪かったけれど、陽の当る所に行き、アップにてとる。こんな風にいい加減に扱っているのに、拝見料もないものだ、などと思ってしまう。

ダワの家に帰ってみると、ラム僧が来てお経を唱えていた。ナムチェの家でも僧が3人ほど1日中お経を唱えていたけれど、彼らはよそ見ばかりしていて何となく不真面目だ。僧の為にじゃがいもが出された。私にも食べろと言う。見たくもないはずだったのに、不思議と3〜4個食べてしまった。メンサーブはじゃがいもが好きで……とミンマは最後までこの事を仲間にしゃべっていたようだ。

水を運んで来た青年も今夜は泊るらしい。夕食はヌードルだった。食後、青年はせっせとチャパティの用意をする。誰が食べるのだろうか、と、煩

の中に放り込まれてふくらむチャパティを見ていると、ダワ老人が私に食べろと言う。今度こそもうダメとばかりに断ったものの食べさせられてしまった。それでもおいしいと思ったのは、いったい私のお腹はどうなってしまったのだろうか。時々チャンが出て彼らの話はいつまでも続いた。

1月16日 晴時々曇

今朝はみんな寝坊をしたようである。出発する頃、老人が起きて来て、チャンを飲めと言う。朝から2杯も飲んでいい気分が出発。途中の茶店で久しぶりに日本人に会う。ここは日本じゃなかったのだ、と改めて変な認識をする。日本にいるような気がしていたのだ。

道すがら、落ちていた大きな松カサを物色しながら、みごとな松カサがたくさんついている木を見ていた。ミンマはニッと笑うとガサガサと林の中に入っていく。良いのを拾ってくれるのだろうかかと見ていると、何と、細い木にスルスルと登ってこれが良いだろうかと思ねる。そして3個ほど取って来てくれた。やたらと物欲しそうな顔はしないでおこう。

ミンマの家に泊る事にして、3時半から、彼の家族と一緒に正月のおよばれに付いて行く。13日から1週間程、ナムチェとクムジュンでは、毎日順に家を訪れて祝うそうで本日で4日目。すでに30人近い大人や子供達が小さな家で騒いでいた。チャンもロキシも溢れる程出される。飲んで食べて歌って踊る。居室が2階なので、床が抜けるのではないかと思う位力強く蹴ってステップをする。一緒にスクラムを組んでやってみたけれど単純そうで仲々難しい。歌は全部同じ様に聞える。飲みながら踊るのだ、男も女も、老人も子供も…暖くなってとても楽しかった。クライマックスに達する頃、ツェンバの粉を顔や頭に付けながらチャンを勧めて回る。逃げ回っていた私もやられてしまった。男は右肩、女は左肩にも粉を付ける。そしてみんな頭も顔も、真白になってチャンを飲み、そして踊る。9時半まで続いた。ミンマはすごく酔ったらしく、家に着くと私のベッドの用意だけして、そのままコテンと寝てしまい妻を困らせていた。

1月17日 晴のち雪

カトマンズに帰る日。シャンボチェの飛行場に人が集って来たけれど雲が気になる。今日で5日

間も待っているという外人がいた。ずっと天候が良くなかったらしい。にわかに不安になる。明後日中にはカトマンズに帰らなくてはならない。10時すぎに雲が湧き上り本日のドラマは終了した。下の茶店で泊る事になったが、この日の長く、そして何と寒かったことか。ずっと雪が降っていた。

1月18日 晴

祈るような思いで外に出る。バンザイ、快晴。8時半、待望の飛行機が到着。でも乗れるかどうか。とにかく6日分の30人近い人々が待っているのだから。どの人も緊張した面持ちで人の乗るのを見ていると、私に荷物は重いかと聞く。軽いと答えると、来いと言う。再び荷物と体重を計って、すぐ乗れと言う。感激!! 心臓がどうかかなりそうなくらい嬉しかった。帰れる……。カトマンズでは私と熊沢さん以外全員集合していて、懐かしい顔が迎えてくれた。カトマンズのあたたかさも嬉しかった。短い短いトレッキングだったけれども少しも淋しいと思う事もなく、よく食べよく飲み、とても楽しいものだった。

ヒマラヤに関する 質問と解答

〈問〉7月上旬にレーの周辺に入城したいと思いますが特別の許可が必要でしょうか。

〈答〉特別許可はレーの街周辺は不要です。いわゆるインナーラインの内側はビザさえあれば(28日間はビザなしでも滞在可)それで充分です。カシミールのラダック地区を通るインナー・ラインはスリナガール——レー道路の南側、レーからバラチャラ——パラングリーの西側を通してオープンするように走っています。詳しくは名城大学発行の「カシミールとラダックへ」に説明文が載っています。(H A Jに在庫あり、送別900円)

〈問〉7月のカシミールの気候はいかがですか。

〈答〉東京の5月末位の気候です。雨は山間部では3～4日に一度位降ります。スリナガールの街ではほとんど降りません。ラダック地方は雨はほとんど降りません。もちろん、4,000m以上の高度ではみぞれや雪が降りますし、川は雪どけで増水することがあります。

英語の学び方（練習）

沖 允 人

インドやパキスタンで私は「日本人はどうして英語をあまりしゃべらないんだ」という質問をよく受けた。そのたびに「日本では「沈黙は金なり」ということわざがあるくらいで、あまりしゃべらない国民性なんだ。それに、英語は読んだり、書いたりではできるけど話すのはニガ手の人が多いんだ。それは海に囲まれた日本は外国との接触が少ないから話すチャンスが少ないんだ。」と弁解がましいことをいうのが常だった。

私のいたインドの研究所にもときどき日本からエライ人が来たが、ほとんどしゃべらない人が多い。他の国の人なら自分の専門の話を自分からすすんですることが多く、内容はともかくとしても国際交流上大きに役にたつことである。

日本人は大体話すことが下手で、しかも外国語でとなると2の足をふむことになる。私とて、例外ではなく、日本語でさえ、人前で話すのはいやなのに、英語でしゃべるとなると身のちぢむ思いがする。しかし、ひっこみじあんではいつまでたっても国際人にはなれないと思う。機会あるごとに話し、書き、読むということを続けて国際的な活動のできる人にならなければいけない。

遠征隊などに参加して外国に行く場合でもその隊のうち1人か2人が何とかしゃべり、あとはほとんどしゃべらないというのが平均的な日本の遠征隊の語学力であると思う。そのために生ずる誤解やミスも多いことである。

インドやネパールの英語はなまりが多く、ヨーロッパやアメリカでもそうだが、なかなか学校でならった通りの英語をしゃべってくれない。教養豊かな人はともかく、インドやパキスタンなどでは平均的にあまりよい英語をしゃべってくれないと思う方がよい。これを理解するのは慣れとカンしかないと思う。相手のいった意味が大体分ったら、それはこういうことだろうと自分の英語で問い直してみることもよい。分らなければ聞きかえすことだ。こっちがいったことが理解してもらえないことがある。それはたいいていの場合文章や単

語が理解できていないのだから問い返されたら別の文型と単語を使っていいかえす方がよい。英会話の本などに同じ状況を説明する文章がいくつも書いてあるが、あれはむだのようだが決して無駄でない。

バザールへ行きたい。

I want to go to Bazar.

I am going to Bazar.

I would like to go Bazar.

など何通りでもいえる方がよい。相手の程度に応じて文章の程度を合せることも必要である。本格的に英語を勉強した人なら、正統でない英語で通じる。しかし、英語の下手なシェルパなどにキングス・イングリッシュをしゃべっていても決して通じない。もっとも彼らはカンがいいのでさってはくれるが、子供に高級な単語や本文を使っても通じないようなものである。その人にあった程度の文をしゃべるよう心掛けるべきであろう。

こちらでも高級な英語が自由にしゃべれる訳でないから、それまではシェルパやホテルのボーイ相手の日常会話でトレーニングの方がよい。だんだん高級な英語が分るようになったら、ぜひ新聞を読むことをおすすめする。忙しければ見出しだけでも見ておく話題にこたかかない。よく政治と宗教の話はひかえた方がよいというが、山と政治と宗教の話を除くとあとあまり熱の入る共通の話題は少なくなる。相手の立場を尊重しさえすれば一番話がはずむのがこの話題であると思う。同じ思想であればもちろん一番いいが、かりに反対の立場であっても悪くはない。

インドの新聞は政治的記事はかなり多く、日本の文化面のようなところは少ない。日曜版にトピックス的なことが載るくらいである。従って毎日の新聞に目を通してると略字（英字新聞には略字が多い）もなじみ易くなり、世界の動きもわかって面白くなる。

高級な英語のトレーニングには社説がよい。そのときどきの重要項目をその社のエキスパートが

格調高い英文で書いている。はじめのうちは、辞書をひきひき、何か、入学試験問題にとり組んでいるような気分がするが、そのうち慣れてくる。難解な構文も多い。これらの時事英語は特有の単語の使い方、熟語がある。

それに関しては新聞英語辞典(矢吹勝二編・ジャパンタイムス社)などがよい。

シンナー遊びはPaint thinner sniffing。圧倒的の大多数はOverwhelming majorityなどというのは普通の辞書ではなかなかひきあたらない。

結局、読む英語が一番強く、次に聞く、書く、話すという順序になると思う。

話すと書くは大体同じ程度にすることは容易である。よく書ける人は流暢にしゃべれなくても、ゆっくりしゃべることにすればいいことはいえるはずである。簡単な手紙くらいは下書きなしで

すぐにタイプで打つようになるという。



読むこと聞くことは他人のペースだから一番むづかしいことになる。知らない単語をしゃべられることも

英語の能力の% 多い。大体のことは前後の関係で理解できる。しかし、不明のことは聞きかえすべきであり、そういう人ならたいい分り易い別の英語で説明しなおしてくれる。

しかし、根本的にはVocaburaly の豊富さが一番力になる。そのためには多く読む、多く聞くことであろう。一番手っとり早く、容易にとり組めるのが読むことである。

英語のニガ手な人は結局は英語に親しんでいない人で、中学生むけのお話の本でも一冊読みきいたら、かなりの力がついているはずである。結局は努力の賜物である。

「なるほど日本人は英語に接するチャンスが少ないかも知れない。しかし、結局はその人の努力による訳だよ。」とはこの小文の始めに紹介したインド人との会話の続きである。

HAJ. 会員増加にご協力をノ

現会員が1名以上の入会希望者をご紹介下さい。入会案内や最近の「ヒマラヤ」などを送ります。紹介は HAJ 名古屋、東京事務所または理事へ。

日本からヒマラヤから

○ 萩須昭大 名古屋 3月30日

私達第二次RCC中部在住同人を中心に推進しておりましたカラコルムのムスタグ・タワーの登山計画もみなさまがたの御厚情をもちまして、ようやく実現の運びとなりました。4月5日先発隊3名、4月12日本隊が羽田を出発し、パキスタンへ向い、6月下旬登頂を目途に計画を推進する所存であります。(後略)

現地連絡先

%Embassy of Japan Plot No.53-70Ramna^{5/4}
Diplomatic Enclave 1, Islamabad Pakistan
Tel 20181-20184

○ ブータン観光局 Tseten Dorji氏1976年2月

3月に入るとブータンの観光シーズンが始まります。貴協会からもぜひまた多数ブータンへおいで下さい。(ブータン観光旅行はすべて観光局の中に

にある旅行社を通すことになっています。) Bhutan Travel Agency, Department of Tourism; Tashchho Dzong, Thimphu, Bhutan, Tel : 479 Gram: BHUTRISM)

○ Mr. A. フィダ スリナガル 3月18日

3月から新しい旅行社を発足させ、その代表(M-anaging Director)として仕事をしております。会社の名は「Trans Himalayan Travel & Tours」で、住所は15/2, Polo View, Residency Road, Srinagar, Kashmir です。(Gram: T-RANSHIMALAYAN) よろしくお願ひします。

(Mrs. フィダさんもお元気です。カレーも普通に食べられるようになったとのこと。8月にHAJの方々と一緒にできるような待っておられます。)

藤江幾太郎・山の画展

時・6月25日(金)~30日(水) 最終日は5時まで
所・新宿、小田急デパート本館7F美術サロン

毎年開催する山の画展、小田急では8回目。

今回は昨年ネパール取材のものも含め、利尻礼文、北ア鏡平滞在制作、東京周辺の山々など80号から3号まで25点出陳の予定。

新刊・旧刊

ビルマ史 G・E、ハーヴェイ著

東亜研究所訳 50年12月 4800円 原書房

ユーラシア叢書の中の1冊。他に『トゥルクスタン』ロス、スクライン著・三橋富男訳5500円も出版されている。

東亜香料史研究 山田憲太郎著

中央公論美術出版 51年 12,000円

アジア、ヨーロッパの文化民族が求めた香料は重要な商品であったが、この本は南宋の「諸蕃志」を中心にしその他の記録や史料も合せて日本における沈香、オリエントにおける肉桂使用を研究解明した学術書。

満鮮史研究(近世篇) 池内 宏著

中央公論美術出版 51年 5,500円

著者は東洋史家として著名であるが、その終生の研究の一部を発表したもの。

考古学上より見たる熱河

島田 貞彦著

国書刊行会 3,800円 51年2月

熱河省の考古学的概論ともいべき本。なお、以前にも紹介したが国書刊行会からは51年3月に参謀本部編の下記の本が復刻出版された。

支那地誌(総体編) 5,500円 明20年刊

満州地誌 4,800円 明22年刊

蒙古地誌 4,300円 明26年刊

西伯利地誌上下巻 12,000円 明25年刊

インドの美術 4,800円 講談社

51年3月2日 4,800円

「グランド世界美術」全25巻のうちの第4巻であり、杉山二郎の解説がある。

シルクロード冒険行

青木 成夫著 51年3月

時事通信社 980円

3等列車でインドを旅し、車でパキスタンへ、そしてシリア砂漠へと一人で旅した面白い話。

未来への遺産 取材記

「中近東・アフリカ」

日本放送出版協会 ジュニアブックス 800円

「NHK未来への遺産取材」3巻を地域部の上下2巻にまとめたものの、本書は上巻で、ペトラ、バーミアン、カッパドキヤ、イスファハンなどを含む。下巻にはアジア編の中にアジャンタ、カジュラホなどが入っている。

アジアハイウェイ よみがえるシルクロード 佐藤 清著

日経新書 51年2月23日 日本経済新聞社 480円

道路の専門家が実地踏査をふまえて書いたアジアハイウェイの現況と未来。ユニークな本である。

心の記—キシュトワールヒマール行—

木村喜代志著 1976年1月 山形大学米地研究室内 高地ユーラシア研究グループ発行 非売品

1975年7月27日～9月27日まで、キシュトワールヒマールを調査旅行した著者の個人的紀行。キシュトワールからウマシ・ラをこえ、ヌンの北面に出てカルギルからスリナガルへ歩いた日本人として初めての記録は興味深い。入手希望の方は著者(HAJ会員)まで問合せられたい。

〒997 山形県鶴岡市新海町30～32

1975年インド・ヒマラヤ遠征帰国報告書 日本ヒマラヤ山岳協会

1976年3月1日 稲田定重、沖允人編 40ページ 600円

「ヒマラヤ」52号のHAAJのヌン隊、ガルワルヒマラヤ隊の速報に、「ヌンクン北面の偵察」とインド北西部の登山情報を加えたもので写真も多く楽しめる。英文概要など4ページの別刷も合せてプリントされている。HAJ特約書店およびHAJ名古屋事務所にあります。残部は沢山ありませんので品切の折はお許し下さい。

ヒンディ語会話練習帖

土井 久弥編

大学書林 51年4月 新書判 2,000円

長い間、絶版になっていたヒンディ語会話の本のかわりに、本書が発行された。122pであるが、登山や旅行のためなら充分であろう。

Traumland Nepal by Frank. D.

(Siiddeutscher Verlag) 11,050円 1976.

ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.

EXPRESS HOUSE

NAXAL BHAGABATI BAHAL

P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL

電略 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE

をご利用ください。

家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もでき
ます。 宿泊代—1泊朝食付30RS から

※長期滞在者はご相談に応じます。

日本語でお問い合わせください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最
後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

(株) ト ラ ベ ル 日 本

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1
ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461

担 当——^{とのい}外池・永瀬・月候・小島

海外登山，トレッキングに傷害保険を

——海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております——

タケ

岳

産

業

にご相談して下さい。ノ

あなたの所得を補償する保険をご存じですか？(所得補償保険)

●所得補償1～5年，傷害特約60～120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益
・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災
保険(株)代理店

タケ

岳

産 業

大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号 〒532
TEL 06 (304) 1115番

●ルスノトキ=大正海上十三営業所 304-5774

大自然の神秘と雄々しさ、 ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はプータン・シッキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

ノー・公害

時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思つてこの都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花園の美しさ。海拔4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウツ湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。

シッキム
ごく最近まで鎖国状態であったシッキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源郷」とはこのことす。王宮を中心に神秘の国が、静かなたたずまいを見せています。ダーズリンからの途中にあるカリンボンの町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。

（註）シッキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要ですが詳しくはエア・インディアにお問い合わせください。

ヒマラヤのリゾートタウン「ダーズリン」は海拔2134mの高地にあります。インドの上流階級や外国人たちの別荘も多く、健康的な雰囲気にあふれた街。このダーズリンの南東わずか11キロの地点にあるタイガ・ヒルから望むカンチエンジュンガ（世界第3位）やエベレストの偉観は、文字通り世界最高のもの。見る人の心に衝動にも近い感動を与えずにはおきません。

ガルワール地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンダデビル（7816m）や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫「花の谷」や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。



世界の35都市をネットする

エア・インディア

東京●千代田区有楽町日比谷パークビル〒100 ☎214-7631
大阪●東区備後町松豊ビル〒541 ☎264-1781
名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ〒450 ☎581-5876
広島●鉄砲町1-20第3ウエノヤビル〒730 ☎28-7211

発行所 柴田金之助 名古屋事務所 四六八 名古屋市中区一ツ山一四四七
編集 集「ヒマラヤ」編集委員会 東京事務所 一六四 東京都中野区中央三丁目四十五一十八 沢本ビル1F
電話 〇五二一八〇一四四一四
〇三三六五一二一六二